another―瞳の中の暗殺者

ma.na

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ａｎｏｔｈｅｒ―瞳の中の暗殺者

【Ｎコード】

Ｎ６４２０Ｇ

【作者名】

ｍａ．ｎａ

【あらすじ】

映画第４作瞳の中の暗殺者記憶をなくすのが蘭ではなく哀だったら？コナンが新一に戻っていたら？という仮想のもとに瞳の中の暗殺者を下敷に作った小説です。■小説の性質上ＵＰに時間がかかります。お待たせしてすいません！！■

プロローグ◆

新一が元に戻って間もない頃、哀は新一に連れられてトロピカルランドへ行った。

人混みは嫌いだと言ったのに…

『オメーに見せたいもんがあるんだよ！』

と言って新一が時計をちらちら見ながら連れてきてくれたのは、2時間置きに噴水が出るという広場。

「へえ…あなたもこういうところ、知ってるのね。以外だわ」
「いや、前に蘭と来たんだけどよ、オメーにも見せたくて。」

と、いう事は…

私のせいで新一の人生を変えてしまった場所、ってこと…

「ここに来たからコナンになれてオメーに出会えた。ここはオメーとの始まりの場所でもあんだ。」

私の気持ちを知ってか知らずか彼はニカッと笑った。

「そういえば、探偵団のみんなとあなたが最後にきたのもここだったわね…」

哀の部屋の写真立てには今でもその日にコナンを含めた5人で撮った写真が飾られている。

工藤新一は今の大切な恋人、だけれど江戸川コナンがいなければこんな風にふたりが並んで歩くことはなかったのだ。

哀にとっても大切な場所であった。

これから、もうひとつ

決して忘れられない…

彼との思い出が増える事になるとはこの時は思いもよらなかった…

そう、忘れてしまってはいけない

彼への思いをもう一度噛み締めることとなる、あの事件…

彼がなくてはならない存在であり…同時に江戸川コナンがどれだけ
自分の人生に―灰原哀の―人生に深く関わっていたのかを…

episode1◆

ある雨の降る日。哀はいつものように少年探偵団と下校していた。
青信号が点滅し、元太たちは青信号が点滅したところを走って渡ろうとしたところ

「こら！！」
中年の男性にとがめられた。男性はそのまま電話ボックスへと入っていった。

「あの人・・・刑事ね。」
ぽつりと哀が呟くと少年探偵団たちは興味津々と哀のまわりに集まってくる。

「なんでなんで～？」
「灰原さん、なんでわかっちゃうんですか～」
「おい、教えろよ灰原！」

コナンが転校していっていない今（本当は隣の家にいるのだが）こういった役割は哀のものとなっていた。

「手帳を横に開いてメモをとっているでしょう？警察手帳だけよ、あんな使い方するのは・・・」

そんな話をしながら次の信号を４人は渡った。
ふと、振り向くと・・・

電話ボックスの前に怪しげな陰。そして・・・

電話ボックスの刑事であろう男性が倒れたのである。

「あの人が撃たれたわ！救急車を！」

すっかりコナンの代わりになってしまったものだと溜息を吐きつつも今はそれどころではない。

そのまま信号を渡ろうとしたがあいにくの赤信号。

やむなく哀は歩道橋を駆け上がったが、反対側の歩道にもう先程の人影はなかった。

電話ボックスには先程撃たれた男性がひとりで横たわっている

（まだ・・・息はあるわね）

「しっかりして！誰に撃たれたの？」

哀の問いかけに男性は左胸を吐かんで見せ、事切れた・・・・・

「もしもし・・・新一？今、警察、って言ってたわよね・・・えぇ、えぇ。」

亡くなったのは奈良沢という刑事ということだった。

哀を含む少年探偵団は新一の引率の元事情聴取を受ける事となった。

見慣れた恰幅のいい警部が質問を投げかけてくる。

「犯人の特徴を話してくれるかい？」

子ども達はそれぞれ適当な犯人像を答える。

光彦が「若い男でした！」と答えれば歩美は「違うわ！中年のおじさんよ！」と反論し更に元太が「キレイな姉ちゃんだったぜ！」とよくもまあそんなに思いつくものだといろんな人物像を挙げていく。

犯人像は期待できないと思われたのか警察からは「犯人の挿していた傘は？」という違う質問が投げかけられた。

「黒！」「緑！」「青だったと思うけど・・・」

これまた子ども達は想像をあたかも見たかのように話していく

「オメーらよぉ・・・」いつものことだとは思いつつ新一は頭に手をやる。

それじゃ何人いるかわかんねっつの。

心の中で悪態をつく新一だったがまだ話をしていない哀に佐藤刑事は話を振った。

「哀ちゃんは？」

「・・・レインコートと傘は灰色っぽかったけど・・・男か女かまではわからなかったわ。

でも傘は右手で持っていたように思うわ・・・」

「と、いうことは銃は左手で撃った、ってことね・・・。」

警察側も哀の信憑性の高い証言を取り入れた。

「ところで警部。亡くなった奈良沢刑事が胸をつかんで亡くなっていたことは？」

新一の問いかけに目暮警部は
「あぁ、我々は警察手帳を示したものとにらんでいる。今手帳に書いてあったメモを徹底的に調べているところだよ」

警察手帳・・・・。何かあるのか・・・？

使用されていた拳銃は9ミリ口径のオートマチックと判明した。女性でも扱える銃である。

明くる晩。
芝という刑事が自宅マンション下で警察手帳死んでいたという報道がされた。
新一はすぐに捜査一課に電話した。
「目暮警部。昨晩の事件について詳しく聞かせていただけませんか。」

しかし普段なら新一を頼ってくるはずの目暮の返答は素っ気無いものであった。

「すまん、工藤君今忙しいから後にしてくれるかね」
そのひとことで一方的に電話を切られた。

「なぁんかおかしいんだよなぁ、警部。」
「あら、現職の刑事が二人も続けて亡くなってるんだもの・・・無理もないんじゃない？」

哀の言う事ももっともではあったが、何かいつもと違う様子を新一は感じていた。

これが今から新一と哀を巻き込む事件の幕開けであるとは、そのときは気付かなかった・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6420g/

---

another―瞳の中の暗殺者

2010年10月13日19時55分発行